

浄土

monthly JODO

2019
November

11

真野龍海大僧正台下追悼特集

法然上人鑽仰会

令和元年九月九日 遷化

延壽光院弘蓮社大僧正

宣譽上人道阿說欧龍海大和尚

世壽九十七



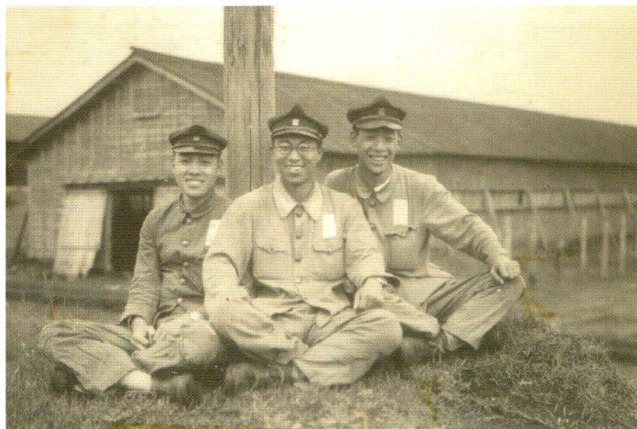
大正大学生時代



横浜の山下公園にて



新開教地となった浄土宗バリ仏教センターの前で



大正大学に在学中の軍事教練
(写真中央)

芝幼稚園の遠足で山梨の
ぶどう園を訪れ

園庭の桜を背景に、天光院の芝幼稚園
園の先生方と一緒に



大正大学仏教学部のインド研修旅行にて



清浄華院の御忌にて



仏前結婚式で
戒師を務める眞野台下

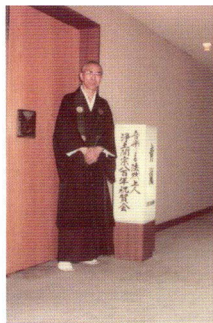


浄土宗の京都宗務庁での勸学会で。前列右端



日本橋三越本店の慈善会展にて。
右の舞妓さんの絵を出展された

ホテルオークラでの浄土宗開宗
800年記念祝賀会



芝コーラス部の集まりで（1997年）



「フランス別時と講話会」で訪れたフランス
のブルトイユ城。城内の別時会場にて。中央
はブルトイユ侯爵、右は高僧光隆開教地主事



平成26年12月3日 梵文学同窓会 於：菩提樹

大正大学の梵文学同窓会で。前列中央

当法然上人鑽仰会は昭和10年5月、当時の社会に、そして宗門に対して最も先鋭なる有志によつて設立された会である。發起人の中心となつたのが、真野正順、中村辨康、さらに三佐藤と呼ばれた、佐藤密雄、佐藤良智、佐藤賢順といった俊英である。そして、その会が発行したのが本誌月刊『浄土』であり、戦前は鉄道弘済会売店で『文藝春秋』と並べられる人気を博していた。戦後の紙不足時代もなんとか発行を続け、本号まで900余号を重ねているが、この間、多くの有志によつて支えられてきている。中でも、真野龍海台下は真野正順上人の想いを継ぎ、当会の興隆、存続に計り知れない御尽力をいただいた。此処に、真野龍海台下を忍ぶ追悼号を刊行する。公私にわたり、種々の分野で活躍された上人を思い出していただければ、これに勝る喜びはない。

真野龍海師

の思い出

真野龍海台下 を偲んで

大本山善導寺法主
大正大学名誉教授

阿川文正

長い間ご指導を賜り、親しくご交誼を頂いた先輩である大本山清浄華院法主真野龍海台下が、九月九日の早朝、満九十七歳の天寿を全うされご遷化されました。

台下は平成二十二年十二月、大本山清浄華院御晋董以来、強い信仰と信念を以って宗門興隆のため教化に盡粹されました。法然上人八百年大遠忌のご巡教にも、ご高齡の身を呈してご親修賜わり、多くの信徒を教化され、又遠くフランスのバリまで毎年赴いて、親しく浄土の信仰を広められました。

小納は、今年九十歳の仲間入りをさせて頂きましたが、真野台下には百歳まで長生きをして頂きたかったと思います。

小納は、台下には時折思い出してはご機嫌伺いの電話を差し上げておりましたが、九州の本山より八月の夏休みを頂いて東京の自坊に帰り、九月七日久留米の本山に帰山。私の手帳の九月九日の予定には「夕方真野台下にご機嫌伺いのTEL」と記入してありました。

しかしお電話をする事も出来ず、九日の午前に訃報を頂いた次第でした。真野台下には、私の台下としての大きな目標でもありましたので、訃報に接した時には、全身の力が抜け落ちてしまった様でした。

真野台下と初めてお会いしたのは、昭和二十七年私が大正大学三年生の秋、教育実習を大正大学付属大正高校（夜学）で実習した時、担当教官が真野先生で、大変親切丁寧なご指導を賜った事を思い出します。昭和三十六年私が大正大学浄土学の講師に就任した時は、真野先生は梵文学の助教授でしたが、それ以来今日に至る六十有余年の最も親しい大先輩でありました。

思い起こせば、真野先生とは数々の思い出があります。先生は梵文学のご専門でありますから、専門的内容は私には詳しく論じる事が出来ませんが、学問の面では非常に厳しいものがありました。しかし他の面では偉ぶるところなく誰ともフランクに接されました。曲った事が嫌いで、頑固な一面もお持ちの様でした。

大正大学が定員増をした時期、仏教学科の各主任教授は七・八課目の講義を持ちましたが、その中の一科目に「スッタニパータ」の講義を担当させられました。宗学専門の私には非常に困難な講義でありますので、早速真野先生のもとに参りご指南を頂きました。親切丁寧なご指導を受け、大変助かった事に感謝しております。

先生と私とは共通点がありました。真野正順、阿川貫達という浄土宗の学者の中でも偉大な師匠に仕え、共に大正大学に奉職し、また私立芝幼稚園、同赤坂幼稚園の園長を勤めておりましたので、先生より「お互いに大変ですネ」とよく声をかけられておりました。

先生は多岐多趣味な方でありました。幼稚園の卒業生のお母様方とコーラス部を結成し、毎月の集いを楽しんでいた様でした。

また絵画を嗜み、京都に赴かれて舞妓の絵を描かれ、銀座の画廊で個展を開かれたり、俳句を能くされて、時々即興作を聞かされました。また隅田川の舟遊びも同行させて頂きましたが、桜花を見ては一句、満月を眺めては一句、と拝聴させて頂きました。

大正生まれの先生はダンディーな方で、パウリスタのコーヒを愛用されるなど、晩年まで銀座散歩を楽しまれ、或る時は、夜のお一人歩きを案じたパトカーに、御自宅まで送られたという微笑ましいエピソードも伺いました。今は総ては懐かしい思い出となりました。台下には数知れぬご恩がございます。そのご恩に思いを馳せ、心よりお十念を捧げます。

延寿光院弘蓮社大僧正宣譽上人道阿説欧龍海大僧正尊靈

普賢行願究竟円満

合掌 和南

正順先生と龍海先生

大正大学名誉教授

齋藤昭俊

正順先生には教室での講義よりも、天光院で晩年横になつてゐる寢床の枕元に座つて、お話をお聞きした印象の方が強い。正順先生のお宅でお話を私一人で聞いているときには、奥様がお茶を出して下さったことを思い出します。二回目にお茶を出して下さるときには、先生に「もうおやめなさい」という合図であつたことを知り、奥様の先生への深い愛情を感じざるを得ませんでした。また、先生は私の指導を「竹中君がいだろう」と言われて、当時助教授であつた竹中信常先生の元で修士論文を書かせていただきました。

正順先生の葬儀（十二月三十一日）のときには、佐藤良智先生が齋藤君に弔電を読ませるようにと、正順先生の最後の弟子と認めてくださったことは、印象深く忘れません。

また、正順先生の五十回忌の法要を龍海先生がなされたときには、私が正順先生に当てて出したハガキを取っておかれたことをお聞きし、師恩の厚さを有り難くかみしめました。私を太正大学の講師に推挙して下さったのも正順先生でした。

その後天光院で初めて龍海さんにお会いしたとき、先生から言われて月刊誌『浄土』の事務のお手伝いをするようになりました。前田龍海という人が印佛学会で発表していることは知っていました。が、真野龍海になっていられたことはこのとき知りました。

『浄土』が出来上がると、龍海さんは大風呂敷に『浄土』を包んで郵便局に持って行ったとのこと。週一回くらいのペースでしばらくお手伝いをし、遅くなると夕食に天井をとって下さったことを有り難く思い出します。

その後、昭和四十六年太正大学もご多分にもれず学生紛争に巻き込まれていました。この時龍海先生は教授で、私は助教教授でした。連日学生があばれて授業は妨害され、教授会も開けない状態でした。大学では学生問題に関する権限を臨時全学協議会に付託をしました。その議長が龍海先生で、私が副議長でした。その役割は一般学生に大学側の姿勢を伝え、紛争に巻き込まれないようにと「学生に告ぐ」というビラをその都度つくり、配ることでした。夜を徹してビラ作りを行ったことを思い出します。

龍海先生が清浄華院の法主になられて、私は二、三度京都に参りました。その都度いつもいつも当時のことを語り、記録を残すべきだと仰っていたことを思い出します。

龍海先生が常々言われていたのは、天光院には三学長のお墓があるということでしたが、それが事実になってしまいました。今年十二月に三学長のお墓にお参りしたいと思っています。

真野龍海台下の 「二幅の絵」

浄土宗東京教区 芝組前組長

野村恒道

真野龍海大僧正台下が、去る九月九日、重陽の節句に往生の素懷を遂げられました。まさに、風雅を愛でられた台下に似つかわしい、菊の節句を選ばれたことになりました。

台下の御自坊天光院さんとは、拙寺が共に増上寺山内で、ごく近隣ということもあり、青年会活動の折等から度々お邪魔をしておりました。天光院さんは、かつて、芝幼稚園を併設されており、その閉園した後の園舎と園庭を利用して頂いた、ファミリー念仏会は、現在でも引き継がれています。往時に園長先生を勤められた台下は、そのバーベキューや花火を混じえた子供向けの催しにも毎年参加され、楽しげに談笑されていたご様子が今でも鮮やかに目に浮かびます。

平成六年（一九九四）図らずも台下から、芝組組長の職を引き継ぐことになり、困惑した状況を迎えましたが、その折は、台下の懇切なるご指導を賜りました。そんな事情のなせることで、ある日台下が申請の書類を持参され、組長印をご所望に拙寺にお越しのことがありました。玄関に足を踏み入れ、嵌め殺しの地窓から、小庭の蹲が覗けるのをご覧になるや、「これは、いいね、一幅の絵になる」とおっしゃいました。窓枠に切り取られた水鉢の周りの情景を絵に見立てられたわけで、流石に普段絵筆を執られ、絵心のある方のお言葉らしいと拝聴しました。さぞかし、常日頃からそうした描写の対象、構図があれば、すばやく目に留められていることだろうなと、感じ入った次第でありました。

平成七年に台下が大正大学同窓会東京都支部長に就任の折、小柄も理事の一人として事務局長を仰せつかり、創立七十周年の勧募事業に取り組むことになりました。支部長の台下を車にお乗せして東京教区各組の組長方に、勧募の協力をお願いに伺ったのも昨日のことのように思い起こされます。

その事業の記念に東京都支部として正大に、平山郁夫画の『須弥山』と題する約二米四方程の、耐久性を高めて焼いた特殊な陶板画を寄贈することになりました。その納入設置も完了して、改めて、台下に伴い芸大の研究室でお待ちの、平山画伯のもとにお礼のご挨拶に伺ったのは平成十五年（二〇〇三）十月二日のことでありました。大正大学の一角を飾る、仏教画を贈るといふ、まさに、台下の面目躍如たる事業の円成でした。

そんな遠い日々も今となっては、誠に良き思い出になっております。

真野龍海 台下長い間本当に有難うございました。

スマートな文化人

東京教区北部組保元寺

里見達人

真野先生に私をお引き合わせていただいたのは、大正大学の学長をされた安居香山先生でした。安居先生と真野先生は昵懇の間柄で、そこに私がお邪魔させていただいた、といつてもよいかと思えます。お二人は同じ滋賀県出身、そして仏専で一緒に学ばれた仲で、まさに刎頸の友とはこの二人の為の言葉といつてもよいでしょう。

そのお二人にお誘いいただき、三人でしばしばお酒を飲みに行きました。まだ若かりし

頃ですから、議論に花が咲くのですが、真野先生はゆつくり一杯飲み終わった頃になると、腕を組み、頭を少々傾げ考え込まれる。難しいことも話していましたが、色々思いを巡らされ、何か持論を述べられるかと待っていると、いつまでも動かない、実はこれが単に居眠りをしているだけでした（笑）。しかし、それが居眠りしているようにには見えない、どう見ても考え込んでいるようにしか見えないのは、実に見事でした。おそらく、同じお姿を見られた方も少なくないのではないのでしょうか。

「僕の絵は上手くはない、そんな僕が富士山の絵を描いたところで誰も見向きもしない、でも、舞妓の絵を描けば、みんなが話題にしてくれる」と真野先生が話された、という話を少し前に聞いたことがあります。私の保元寺にも真野先生の舞妓さんの絵を飾ってあります。他にも何枚もの舞妓さんの絵も見ましたが、おそらくうちにある絵が一番上手いのではないのでしょうか。間違いなく自信作に違いありません。

真野先生はとにかく多才、そして話題も豊富で僧侶でありながらスマートな文化人、というのが、一年後輩からみた真野先生でした。そして同時に運の強い方でもあった。ご病氣もあり徴兵されなかったこと、天光院というお寺に縁を結べたこと、安居先生の後を継いで大正大学の学長になられたこと、そして清浄華院にお上りになられたこと。もちろん温和な人柄があつてのことですが、人生の巡り合わせに恵まれた方でもあつたかと思えます。おそらくご本人も天寿を全うされての往生素懷だと思います。心より御冥福をお祈り申し上げます。

真野台下の思い出

大本山清浄華院 執事長

吉川文雄

今から十数年前、私は大本山清浄華院の非常勤執事として、総本山知恩院の「法然上人800年大遠忌準備委員会」に出席をしておりました。何度も会議は開かれたのですが、その度に車椅子を押されてお帰りになる、端正なお顔立ちのご上人をお見掛けしていました。あとで知ったことですが、その方が当時知恩院の顧問をされていた真野龍海上人でした。それから数年が経ち、私が執事長としてお仕えしておりました伊藤猥下が知恩院へ上がられてから、清浄華院のご法主に決まったのが真野龍海大僧正でした。年末に、当時浄土宗の宗務総長であった里見法雄上人と東京の自坊天光院へお邪魔し、初めて台下とご家族の方々にご挨拶をさせて頂きました。

年が明けて引越しも終わり、清浄華院の法要に御出座されるようになり、台下から色々なことを伺いました。歌が好きで東京の方で合唱の会を作っていること。祇園の舞妓さんの絵を描いていることと、フランスのパリで展覧会を開いたことがあること。梵文学が専門であること。滋賀県出身で、三歳の頃にボリオに雇いお母上に清浄華院のすぐそばの京都立大病院へ何度も連れて来てもらっていたこと。まさか八十年後にご縁があつて清浄華院の住職になるとは夢にも思っていなかったこと等々、本当に不思議なご縁だなあとお参りの皆様にも話しておられました。嬉しいことに京都が好きだとも仰っていただき、清浄華院の畳の上を歩いていると、足の調子がとても良いとも仰ってくださいました。

また、台下は浄土宗ヨーロッパ開教センターのあるフランスへ、10年以上通われました。現地の開教師とは大正大学時代の子弟関係なのですが、フランスのメンバーの方々に、台下の説かれる仏教の話を大変喜んでいただき、台下の軽妙なお話しぶりには、同行させていただいた私達も思わず聞き入ってしまうほどでした。

清浄華院には食堂の設備がありませんので、食事は外食か出前という事になります。私も何度も一緒に昼食を取らせていただきましたが、台下に「何を召し上がりになりますか」とお尋ねすると、必ず肉系のメニューを仰います。お元氣だから召し上がれるのか、お肉を食べるからお元氣なのかはわかりませんが、台下のお食事は「肉」と私の記憶に刷り込まれてしまいました。

そのお元氣な台下が令和元年9月9日午前7時5分、台風15号が千葉の上空を通過し、東京の空に青空が戻ってきたところご遷化されました。浄土宗と揉めている私のことを前日までご心配頂いていたと、天光院の御住職からお聞きました。台下の為に何もできなかった私のことまで氣にかけて下さって、いつも清浄華院の為なら何でもすると仰っていた心の広い台下に、どれだけ感謝を申し上げても足りないような氣がしています。

京都が大好きだった台下のお気持ちを思い、清浄華院の墓地にてお眠りいただく予定です。

經典電子化の先駆者

大本山清淨華院執事

香林浩道

今年七月、御前様は、「香林さん、あれ活用していただく方法、考えてください」そう言っ
て本山から車に乗車されました。

「あれ」とは、十数年前、『選択集』奉戴八百年記念事業で、教学院理事長をなされていた御前様は、『選択集』の電子化と索引作成の事業を、お弟子の岩崎上人とともに進めていらっ
しゃいました。当時私は、事務方として御前様のご自坊へもお伺いし、検証などにも協力
させていただいております。CD・ROMが完成し、奉戴記念法要にて、総本山知恩院
大殿の法然上人の前に奉呈され、涙され報恩感謝のお念仏をされている姿は、今でも御前
様との原風景になっております。この事業が、今日、浄土宗の典籍電子化の奔りとなって
いることは間違いないと確信いたしておりますし、電子化が進む經典の先駆者でした。

本山にご晋山されてからは、私とのやり取りはもっぱらメールでしたし、種々の原稿を
ご依頼いたしますと、一太郎で作成された原稿を頂戴致しました。私事で恐縮ですが、私
の父は昭和二年生まれで、和文タイプライターを終生愛用いたしておりましたが、大正生
まれの御前様は、パソコンで：「これからはコンピュータが使えないと論文も書けなくな
るしデータを活用できないとダメだよ」が私への口癖だったように思い出されます。

本山での生活での一面では、若い職員との会話「御前様晩御飯いかがいたしましう？」
御前様「今日のお昼は、とんかつをいただきましたので、晩御飯もとんかつが食べたいで

す」職員「????」お肉が大好きな御前様でしたので、お野菜をお肉の下に敷き詰めておいてもお肉だけ上手に食されていました。職員との忘年会で、御前様に料理はどうしましょとお尋ねすると、「焼き肉!」「すき焼き」のお答えが帰ってまいりました。量的に召し上がるのは多くないのですが、若い職員にすっかり食べて頑張ってほしいとお心積もりだったのではないのでしょうか。背広に帽子をかぶりステッキをもつて職員とともに焼肉屋さんへ入っていかれる、そんな気さくに接してくださる御前様でもありました。

法の風を流される台下

フランス開使

高僧光隆

それは15年前、真野龍海台下がフランスに来られた時のこと。季節は初夏の頃。パリ郊外の私どもの家でご近所の友人たち、その子供達が相寄り、夕方から深夜まで時間の経つのも忘れ楽しく過ごした日がある。友人達、子供達にとって異国の仏教のお坊さんが来ての集いなのに、まったく自然で、楽しく、愉快な忘れられない夕べになった。台下はいつも自然体。他のスタイルを持ち合わせのない方。ですから生じることも自然そのもの。

このイベントにはちよつと前置きがある。台下はご自坊天光院でお檀家の方々と種々の文化活動をされていた。その発表会がパリでも行われることになった。それも自然にそのような運びになったとのこと。そのオープニング・開眼式に私達のご近所の友人達が興味を持たれパリに出かけることになり、それぞれに車で出発した。しかし、その時は渋滞時間。あいにく彼らはその行事に間に合わなかった。それで後日、再度私達が住む村で再現

することになった。それも自然な成り行きだった。その当日、私の家の庭に友人達、その子供達、そして天光院文化活動に参加されている方々四、五十人ほど集った。台下は正式な装束でお孫さん（現天光院住職の真野威人上人）と共に祭壇設置の庭道場に入堂。そして短く仏教法要を厳修。その後、台下は皆さんにご挨拶、お話しをされた。それは誠に和やかな雰囲気、言葉で形容できない風景でした。こんなことが出来るのか、ここがフランスとか日本とかを感じない不思議な場になった。

それから台下を囲んでワイン、食事をいただきながら楽しく語りました。子供達は日本の歌を歌い始めました。「さくら さくら」です。子供達は三、四年前、小学校の文化祭のため世界各国の歌を練習していた。それを覚えていて歌ってくれたのです。その後、ご返礼として台下も歌われた。シャンソンでしたでしょうか。長い初夏の夜、笑い声の絶えない誠に楽しい時を過ごしました。これ台下のお徳、お人柄により生じた果報そのものも真野台下にご講話をいただきたくお願いした次第です。台下は快くお引き受け下さいました。創立披露会の会場はパリ・シャンゼリゼ大通りから少し入ったところのホテルの大広間。それでも台下のお徳、お人柄による果報が生じました。台下は仏教を、ナムアミダブツを仏教の言葉の原語であるサンスクリットを、フランス語、英語の単語を交えてわかり易く、ユーモアを交えて説明、お話し下さいました。この時、もうお一人の先生、フランスの仏教学者、ジャン・ノエル ロベール先生（現在コレッジドフランスの教授）にもご講演をお願い致しました。台下とロベール先生は直にお話が合い、その後の七年間、お二人は毎年お越し下さり、お話し下さいました。誠に台下のお陰です。その講話後の披露パーティーの時、お一人がわたしのところに来て言われました「真野台下が法の風を流し

て下さいましたね…」と。正にそのとおりでした。その後もずっと法の風を流され続けて下さいました。浄土宗ヨーロッパ仏教センター一同、台下に心より深く感謝しています。真野先生・台下、誠にありがとうございます。私達はいつも台下と共にあるものです。

合掌 ナムアマミダブツ

真野龍海先生 の思い出

法然上人鑽仰会会長
大正大学名誉教授

佐藤良純

先生に初めてお目にかかったのは、私が小学生の頃でした。大泉（東京都練馬区）にあった、大塚（文京区）・西信寺の大乗学寮の畑でお芋ほりをした時の写真が残っています、昭和15年ごろです。大正大学に入学してからは先生は梵文学で、私は隣りの佛教学研究室におりました。私はパーリー語佛典研究が専門でしたので、多くのことを教えて頂きました。私がインドでの3年間の留学を終えてパーリー語を教えるようになってからも色々ご教授いただきました。その後、安居香山先生のとをつがれ、大正大学の学長を務められました。先生はお身体が少々ご不自由でしたが車の運転がお好きで免許取得の際に検査官から「是非とも合格してください、ほかの人の励みにもなりますから」と励まされたと伺いました。ある時、房総半島一周のドライブにお供しましたがこちらは後部座席の狭い席で体をエビのように曲げての数時間に閉口していましたが、先生は悠々しておられました。ちなみに助手席には石上善應先生が座っていました。

日本画、特に舞妓さんを良く描いておられました。何枚かは学長室に飾っていらつしや

いました。また、フランス・パリにある高僧光隆師の浄土宗開教区にも毎年赴かれました。開教所の他には何処にも見物にいらっしやらずひたすら仏教の教えを説かれておられました。

三重県津市から上京されて学問一筋のご生涯でした。大正大藏經の索引の大正大学の分担は、ご専門の般若經、それも殆ど呪文（陀羅尼）の部分で、サンスクリットの原語がわからず、我々分担者も困りましたが、先生は解らないことは、はっきり分らないと記せばよい、との立場をとられました。多年、浄土宗伝宗伝戒道場の教誡師（梵字）を務められ、そのあとを私として袖山榮輝師と続く基礎を築いて下さいました。

また、本誌の発行元である法然上人鑽仰会の会長を務められましたが、ユーモラスな一面もお持ちで、若い時は一人で 雑誌『浄土』の編集、発送を担当され、いつも「浄土（宗）を背中に背負っています」（その頃の『浄土』誌はページ数も少なく一人で全部を背負えました）とか、五十歳になられたとき、「やっとご住（五十）職になりました」と話されていました。

今ごろは、畏友、安居香山師と極樂浄土で語りあっておられることでしょう。

祇園の話に花が咲く

銀座 京のおばんざい真里福

辻由起子

真野先生と最初にお会いしたのは、私が四十年ぐらい前に開いた赤坂のバーでした。開店して二年ぐらいでしょうか。事前に京都のいちまめちゃんから電話をもらっていました。

それ以来、いつも開店間もない早い時間にお一人でお顔を見せられると、楽しそうに祇園の話をされていました。私が京都生まれの舞妓でしたから、話しやすいのでしよう。お見えになるのは、年に数えるほどでしたが、いつも祇園の話に花が咲きました。

真野先生は京都で舞妓さんの絵をよく描かれていて、お座敷前に二時間ぐらい、それを一週間ぐらい続けて描かれていたようです。真野先生の絵のモデルになるのは、どちらかというととぼつちやり気味の可愛らしい子が多くて、着物も色鮮やかに描かれていて、その色使いが真野流でしょうか。楽しみで筆を取るいわゆる趣味の絵、といったら先生におこられるでしょうか（笑）。

みなさん、舞妓をモデルにしたら花代が大変だろうと思われるでしょうが、確かに誰かの紹介がなければ置屋さんと縁が結ばれません。ですが、上手く縁が結べて馴染みになれば祇園の花代は東京の花代に比べたら、それは親しみやすいのですよ。

天光院で舞妓さんの絵の個展を開かれたときに、「自分の絵があるから」と京都からいちまめちゃんが登場しました。舞妓さんの絵は、それこそ林武先生をはじめ多くの画家が描かれています。やはり舞妓さんならではの魅力があるのでしょう。舞妓さんも今は地方出身の子ばかりになって、京都生まれの舞妓さんはいなくなってしまうました。

ここ銀座に京のおばんざいの看板をあげているこの店は十四年前からですが、真野先生の来られるペースは赤坂時代と変わらず、たまに顔を見せられると、こうした京の話や舞妓さん話を楽しんでいました。真野先生と祇園の話ができなくなるのは少し淋しいですね。

真野龍海大僧正台下 プロフィール

《まのりゅうかい》

1922年滋賀県に生まれる。1944年大正大学
仏教学部梵語学卒(専攻=梵語学、印度初期
仏教、般若経)、講師、助教授、教授を経て、
仏教学部長、研究科委員長、同学長。文学博
士。名誉教授。名古屋、仏教、淑徳、九州各
大学非常勤講師。芝学園理事長、浄土宗パリ
仏教センター顧問。浄土宗勸学職、浄土宗布
教委員長、知恩院顧問、増上寺学監。2005年
宗門功労者。2011年より大本山清浄華院法主。

学生時代数ヶ寺の浄土宗寺院で研鑽を積ん
だ後、東京教区芝組天光院真野正順師の弟子
となる。1963年より同寺の住職を務める。ま
た正順師の始められた法然上人鑽仰運動を継
承し1997年から2007年には『浄土』誌の発行、
法然上人鑽仰会会長を務められた。

また自坊では幼稚園の経営、そして趣味を
活かした絵画の天光院展やコースなど数多
くの事業や行事を行われた。

1995年には勲四等旭日章受章。

著書

『現観莊嚴論の研究』『梵文八千頌般若経索引』
『般若波羅蜜多の研究』『般若心経と念仏の心』
『行く河の流れー物語と仏教』『仏の道』『自
然に学ぶ』『往生』『浄土の道』等。

念仏は 生きている 仏教

真野龍海

生きている仏教

知恩院副門跡をお勤めになり鎌倉大仏（高德院清浄泉寺）の貫首でもあられた佐藤密雄上人のお言葉です。
ある時、乗り合わせたタクシーの運転手さんが言っ

ていた。「京都のお寺で仏教が生きているのは知恩院だけだ」と。

これはかなり前の事です、興味のある発言です。京都の運転手さんは、観光都市にふさわしく、なかなか勉強家です。おそらく会社でも講習会があるのでは

ないでしようか。私も観光で予約をしたら、その方は、一夜漬けながら、コピーを取って行く先の勉強をしてきていました。かなりつつこんだ事も知っていて感心しますが、乗客には当然寺院関係も多く、耳学問もあることでしよう。

さて、彼はどうして知恩院だけと言ったのでしょうか。京都には多くの宗派の大寺院もあるし、そこでは、もっと厳しい修行もあり、在家の方も研修されているわけであります。

私は思います。運転手さんは、観光で寺院を内部まで案内しても、厳しい修行の場までは行きませんし、通常の外からの案内でしかありません。しかし知恩院では、多くの「おてつぎ運動」の人たちが、見学し拝むだけでなく、自ら念仏を称え、渡り廊下をわたって行ったり、奉仕作業を行う姿を見ることができます。そのことが彼に、よそのふつうのお寺参りと違って、知恩院には「仏教が生きている」と言わせたのではないでしようか。

先にも述べましたが、知恩院の驚張りの廊下を踏んで、声高らかに行く姿は、まさに、仏教が活き行く姿です。我々は自分のことはあまりよく分からないこと

が多いですが、そう言われて見ると、まさに、生きている姿そのものと言えましよう。

感動の行道念仏きんどうのぎんぶつ

また運転手さんの話になりますが、もう一つあります。今度は私が聞いた話です。御忌の時でした。知恩院からの帰りのタクシーで、問いもしないのに運転手さんが「私は何度となくお客さんを案内して来るが、この間、お客を待っている間に、知恩院の大本堂に上がっていつて外から法要を見て(?)いたら、大勢のお坊さん達が列を作って右左と歩いておられた。こんなに感激というか有り難いものかと感心しました」と言うのです。

これは、しやうねんぎんぶつぎんどう 行道念仏のことです。法然上人を追慕する御忌の期間に、百―二百の全国から参集せられたお坊さん方が、法服も厳かに、法要の中、列を組んでお念仏を称えながら指示に従って時には左右交叉しながら堂内を歩まれ――行道されます。伴奏は木魚の代わりに、笏を縦に半分ずつに割ったような形の木板を拍って調子を合わせます。その「バシリッ」という音

がなんとも言えず荘重で堂内を引き締めます。それで、笏念仏と言います。左右交叉と言いましたが、右左の列が反対方向から進んですれ違うのを、参拝の側、横から見てみると、ちらちら、きらきらと、なんともいえない有り難さがあります。運転手さんは、それをするのです。

じつは、この私も若い時、仏教専門学校の伝道部にいまして、知恩院の御忌に天幕伝道に参上しました。ひとしきり自分の出番を緊張して勤め終わって、大殿に上がりましたら、たまたま、この笏念仏行道が行われている時でした。大変感激しました。なんだか知りませんが、法悦というのか、目頭が熱くなる思いでした。のびやかで単調な念仏にあわせての僧侶方の行道ですが、そのとき私は今終わったばかりの伝道の興奮もあつてのことかと思っていました。しかし、運転手さんのほつりと漏らした感想に、今更ながら吾が青春の感動と重ね合わせて、なるほどと感心しました。

さて、ここで言いたいことは、多くの人に感動を与えている声を出しての念仏が、特定の人だけでなく、誰でも出来ることだということです。

私は、最近、野外で若者達が幾万と集まって、ライ

ブコンサートを体でもって感動し共鳴しながら聴いている光景をテレビで見て、その昔、念仏もこうではなかったかと思ひ合わせています。

法然上人の時代までは、仏の教えの説法とか、仏への法要が、大伽藍の中で、民衆と距離を置いて、より遠いところか、隔絶して厳かに行われたものでしょう。しかし、法然上人伝など見ますと、法然上人の説法を、その近くの縁側で誰でも腰を掛けて聞いています。仏様へのお勤めは、別に経文を読まずとも、誰でもお念仏さえすれば、阿弥陀仏に呼びかけることになります。ステージで歌手だけが歌っているのではなく、みんなが感動し声を上げ共鳴しています。法然上人も民衆も同じ念仏で、声を上げて感動しました。また、踊躍の念仏をしました。

称名の不思議

今、お念仏といいますが、誰でも南無阿弥陀仏とお称えすることと知っています。なんまんだ、なまんだ、なむなむ、など申しますが、それは、お念仏が民衆の心になじんだものといえましょう。

ところが、聞名という言葉を目にされた方もあると思います。ふだんの「日常勤行式」ではあまり使われていませんが、お経を読んだ後に、「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転」と句読されて読まれているのを耳にされるのがおありと思います。お名号を称えるのではなく、聞くというのなぜかと思われるでしょう。

これは『無量寿経』（下）の中の経文で、意味は、阿弥陀仏の本願の力は、み仏の名を聞いて往生したいと思えば浄土に往生できるという意味です。しかし、どうして称名ではなくて聞名かと思う方もあると思います。

その理由の一つは、当初、御仏の御名を呼ぶのは失礼になると考えられたからだと思います。例えば、今でも浄土宗の最高の御門主の賞状や辞令書でも代読するときは御名前を読み上げずに御名と読むのと同じです。

般若経などのお経でも、一般庶民衆生は名を呼ぶことなく、他の仏様方が仏を称えるのを聞く、つまり、聞名であることを伝えていきます。旧約聖書にも「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。主はその名をみだりに唱える者を罰しないではおかないであ

ろう」と書かれています。これはちよつと厳しいですが、それ故に、今も名を呼ばずに「我が主よ」という表現で賛美歌等も歌われています。そう言えば一家の中で両親の名前は呼び捨てにしませんね。

しかし、念仏の教えでは、阿弥陀仏と我ら衆生は同心一体で、慈父慈母のように接してくださいます。朝の参詣の時、夕べの参拝の時、嬉しいにつけ哀しいにつけ、御名を称え阿弥陀仏の懷に飛び込んで称名念仏いたします。行住座臥、いつでも称名可です。

私は一人でよくドライブします。ある時単調な道を行く中、雨が来て、ワイパーを動かしました。調整が悪いのか、グググと音を立て始めました。いつしか、それを木魚代わりにお念仏を称えていました。不遜な私と思われますか。少なくとも仏様は苦笑されているだろうが、嘉されるだろうと思つたことでした。聞名の堅苦しさのようなものは称名にはありません。

なお、往生を求めながらも、称名ができなかったりする方は、「来迎引接」の願があります。念仏以外の事、善根功德によって往生を願っても阿弥陀仏は迎えに来られると、四十八願の中の第十九に述べられてあります。

名前を呼ぶこと

人と接する時に、名前で呼ばれると親密感が増し、ぐつと親しみが湧いてきます。しかし、かく申し上げている私は、きわめて人と、お顔を覚えることが苦手です。同窓会長をつとめていて全国の支部長さんとか、出張の時に御世話になる方が多いのですが、なかなか名前が出てこない。あんなに世話になっていて、もう名を忘れたかと思われそうで困ります。

ある時、京都でカラオケに案内され店に入りました。見覚えのない店なのに、店の人は私を覚えていました。行ったのは私の記憶にないくらい前のことです。私は特徴のある歌を歌ったから覚えているというのです。それで思い出しました。その頃なら「枯葉」だろうと言うと当たりました。店の人は名をメモしたのでしょう。そうすると、その商売熱心さが印象的で、心が通います。

そういえば、これと似たことがありました。別の店ですが、入って腰を下ろすなり、私を覚えてと言う。やはり変わった歌を歌った客と言う。これは

「ジョニーへの伝言」でした。私はあまり歌われない歌が好きです。それ故私の名前を覚えていたとあれば、こちらにも、その人情がうれしくなります。

名前では、浄土宗でもおそらく私ひとりだけという呼び方をされたことがあります。若い頃、法然上人讃仰会の『浄土』誌の編集事務を担当していた頃、銀行の窓口で待っていたら、「法然上人さん」と呼ばれました。そういう略称が窓口風なのか、とにかく私は面はゆい気持ちでした。お陰でか、今日にいたるまでその会に奉仕しています。

御忌には全国各地から出勤の僧が、法要の前に衆会堂で、整列のために、順次「何々の国何々寺」というように寺名の呼び出しを受けます。盛儀を盛り上げる緊張が高まります。名を呼ぶことは不思議な作用です。

拙句 「国々の名乗りを受けて御忌の僧 龍」

浄土

2019/11月号 目次

カラーグラビア 真野龍海師の思い出	1
真野龍海師の思い出	阿川文正 6
	齋藤昭俊 8
	野村恒道 10
	里見達人 11
	吉川文雄 13
	香林浩道 15
	高僧光隆 16
	佐藤良純 18
	辻由起子 20
念仏は生きている仏教.....	真野龍海 22
連載 釈尊より法然へ③.....	頼住光子 28
連載 微風吹動	名和清隆 36
連載 法然上人と親鸞聖人②⑥	林田康順 40
連載 マンガ さっちゃんねッ	かまちよしろう 47
編集後記	48

表3 貧乏骨董

三宅政吉

表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

釈尊より 法然へ

大乘仏教における浄土宗

法然上人讃仰会

講演概録

3

東京大学教授

頼住光子

次に、法然上人の考え方につきまして、主著になります『選択本願念仏集』を中心としてお話をしてみたいと思います。

『選択本願念仏集』は浄土宗立教開宗の書とされており、浄土宗にとって一番根本になる非常に重要な書物です。

この『選択集』の一番重要だと私が思っているところは、三昧発得を経て『選択本願念仏集』が書かれているということです。この意味についてはまた後でお話しできればと思いますけれども、『選択集』が三昧発得と非常に密接な関係にあるということは押さえておきたいと思います。

①まず『選択集』をなぜ書いたのか。教えの目的です。

これは生きとし生けるもの全て——先ほど申し上げましたけれども、一切衆生ですが、

生きとし生けるもの全てとともに成仏する。共同成仏ということですから。みんなで成仏する。これは浄土教に限らず、法然上人に限らない、大乘仏教の究極目的だと私は思っております。大乘仏教の中にもいろいろな方法論があるのですが、法然上人の場合には一挙に全て、みんなで成仏するという汎用性といえますか、その非常な広がり、そのところは大きな特徴になっていると思うのです。

②その次は現状認識です。

救われるべき人たちは一体どういう人たちなのかというと、現状では「末法の罪惡の凡夫」であるという認識なわけです。先ほど言いました三学非器ということになるのではないかと思います。ただ、法然上人自身は、智慧第一と言われていますし、先ほど申し上げましたが、ご自身で念仏三昧を何度も成就しているということから推察しますと、もし法然上人が自分一人の三昧、自分一人が悟るということを求めるのであれば、それは決して困難なことではなかったと思います。生涯不犯の清僧ということで持戒の点でも何ら問題はなく、ご自身が悟るだけであれば、多分そんなに難しいことではなかったかと思うのです。けれども、法然上人は自分一人が悟ればいいということではなく、一切衆生とともに悟るという問題を非常に大きな課題として掲げていたので、ご自身を一切衆生の代表として凡夫であると押さえ、そしてその凡夫がどうやって成仏するのかという問題を非常に深く考えていったと思えます。

要するに、法然上人は、そういう意味でいうと、利他の菩薩と言っているのではないかと私は思います。ご自身は、自分のことを罪惡の凡夫というおっしゃり方をしていらっしやいますけれども、半金色の善導大師と同様に、凡夫でありつつ仏であるという存在であつ

たと考えられるのではないかと思います。法然上人の死後に書かれた伝記などでは、法然上人を仏菩薩である、仏の化身であるという扱いで書いています。これはただ単に宗祖を神格化して権威を高めるということだけではなく——もちろんそういうことがなかったとは言えないのですが、むしろ法然上人というあり方の特異性から、こういう問題が出てきているのではないかと思います。

③その次に「浄土門の確立」です。

最終的な成仏に向けて、どんな道が可能なのか。一切衆生の成仏、共同成仏に向けてどのような道が可能なのか。仏教には多くの法門があります。一切衆生を、しかも一挙に全て救えるのは何なのかというテーマを法然上人は展開したということになると思います。先ほど申しましたように、一切衆生の成仏というのは、利他行ということを中心に据えた大乘仏教の一番中心にあるテーマだと思うのです。そのテーマを真正面から受けとめ、それを一挙に解決しようとしたのが、法然上人ではないのかと思います。

④その次に「救済の方法論」です。

救済の方法論を人々に説いたり授けたりできるというのは、先ほど申し上げましたように、半金色の善導大師と同様に、法然上人が単なる凡夫ではないということを意味していると思われます。その方法論をどう据えたのかというと、まず最低最悪の凡夫が救われる状況を法然上人は非常に深く考えるわけです。それは具体的には下品下生ということで、最低最悪の下品下生が救われるということであれば、要するに下品下生以上の全てが救われるということになるわけです。

この下品下生というのはどういう人かといいますと、五逆・十悪という人間としてやつ

てはいけない行いをしてしまった人です。五逆の中には、自分の親を殺すということまで含まれていますから、人間として最低、最悪のことをしてしまう愚人であり、悪人であるという人です。

「命終らんとするときに臨みて、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説き、教へて念仏せしむるに遇はん」（『観無量寿経』下下品）ということ、五逆すら犯すような愚人、悪人というものが、自分の臨終に当たって、善知識である導き手から、念仏しなさいと言われるわけです。念仏というのはもともと観想念仏ですけれども、そういう観想念仏をしている余裕がない。それだったら無量寿仏、阿弥陀仏の名前を称えなさいと言われて、この愚人は、自分は五逆という人間としてやってはいけない罪を犯してしまったから、もう地獄に落ちるしかないわけですが、地獄に落ちたくない一心で念仏を称える。例えば、先ほど言いましたように、仏教の一番の目的というのは悟りを開くことですが、悟りを開きたいと思って念仏しているわけではなくて、この五逆・十悪を作った下品下生の愚人の場合には、とにかく地獄が恐ろしい、そんなところへ行きたくない、何とかならないかと思って、それで教えられて念仏を称えるということです。そういう人でも念仏を称えれば往生できるというのが、浄土の教え、法然上人の教えということになるわけです。

五逆を犯した悪人の臨終という限界的な状況を考えますと、自力では何もできない。自分がずっと悪いことをし続けてきた。五逆すら犯してしまった。臨終ですからもう修行もできないわけです。このままでは地獄に落ちるしかない。そういう状況に陥っているわけです。さらに、仏教の考え方は輪廻転生ですから、今までずっと過去にわたって悪いことをし続けて来た、多分、未来もずっとこうやって無限の苦しみを受け続けるのだらうと思っ

た悪人が、そこで念仏を称えるというのは、もう自分は悪人であって、これしかないんだと、ある意味で覚悟をする。要するに、今まで漠然と悪を積み重ねて、親まで殺してしまったような人が、自分は悪であつたという形で最後の臨終のときに自らを確定する。要するに、自分が背負ってきた無始無終の流れを一旦、せきとめて、自分を悪として立てるということが、ここであるのではないか。臨終という絶体絶命のところにおいて初めて、自分はどう悪でしかあり得ないというところがはつきりしてくるのだと思うのです。だからこそ、最低の悪人を救う絶対救済の教えに従えるということになるのだと思うのです。

よく念仏を易行と言うのですが、この易行性というのは別に、気楽にできる行ということではなくて、死を目前にして何の行もできなくなつて追い詰められたときにも、念仏なら称えられる。そのぎりぎりのところでもできるという意味での易ではないかと思うわけです。易行を気楽にできるといふうに捉えてしまうと、法然上人が考えた、ありとあらゆる人を救えるという、その持つている深い意味が抜け落ちてしまうのではないかと思うのです。

特にここで私が注目したいと思つていますのは、最低の悪人が臨終に、地獄に堕ちたくないと思つて称える念仏を行として認めているということです。ここに、法然上人の教えの一番のすごみを感じるわけです。「法然が菩提心の行を選び捨てる」という、非常によく問題にされるところですが、例えば明恵上人が『摧邪輪ざいじゃりん』において非常に厳しく批判しているところですが、この「菩提心行選捨」もやはりこの文脈で捉えるべきでしょう。臨終において最低の悪人が、しかも悟りを開きたいというような、ある意味、高尚な動機ではなくて、地獄に堕ちたくないというその一心で称える念仏も、それは仏教の行だ

と認めていくところに、法然上人の大乘仏教者としての非常な深さというものがあるのだと思うのです。

法然上人は菩提心を求めることを別に否定しているわけではないのですけれども、でも、菩提心行でなくてもいいんだと言っているのは、下品下生の成仏、往生ということを考えたときに、下品下生が臨終で、地獄へ堕ちたくないと言って称える念仏には菩提心はないわけです。菩提心というのは悟りを求める心ですから。それがなくても、地獄に堕ちたくないという一心で、要するに、地獄に堕ちたくないということは自分を悪として確定したということです。その確定ができれば、もうそれでいいという考え方で行を考えていく。ここには大乘仏教の一切衆生の成仏ということを一番のテーマにして中心的に展開していったときの、いわば極北というものが見えてくるのではないかと思うのです。

先ほども言いましたように、最低最悪の悪人、親を殺すような悪人が、また仏の体を傷つけるような悪人が、地獄に堕ちたくないと言って、それで念仏を称えるのですけれども、地獄に堕ちたくないというのは、言いかえれば、苦を厭い、安楽を求める気持ちなわけです。先ほど言いましたように、ここで悪人は別に、菩提心を起こして悟りを求めているわけではなくて、とにかく地獄に堕ちたくない一心だということです。地獄に堕ちたくないということは、自分を悪として理解して、その悪の結果として、報いとして与えられるその苦しみを恐れ、そして安楽を求めているということです。それで称えられる念仏が行なんだというのが、法然上人の大乘仏教者たる深さだと思うのです。

安楽を求めるというのは、ここで悪人が考えているように、地獄に堕ちたくない、できれば浄土へ行きたいということです。けれども、その安楽について、より純粹化して考え

ていくならば、その安樂の究極というのは、仏教的に言えば悟りになるわけです。法然上人は人間が追い詰められたところで、苦を厭い、安樂を求めているということ、現象としてはそれだけですけれども、それは最終的に考えていくと、最高の安樂である悟りを求めることに究極的にはつながっていくと解釈してあげているのではないかと思うのです。現世で菩提心がなくても、念仏を称えれば往生できて、浄土において菩提心を起こして、そこで悟りを求めるのだと法然上人は言っておりますので、そういう道順で、この世において悟りを求めるという菩提心がなくても、自分を悪として決定できれば、そしてそこで念仏が称えられれば、それでいいと法然上人が解釈している。

これはすごいことではないかと思うわけです。普通は、悟りを求めましようと思教は言うのです。悟りを求めているということは念仏を称えているということの中に究極的には含まれているから、最終的にはつながっているのだから、念仏を称えていればいいと言えらるというの、先ほども言ったように、普通の人間ではなくて、仏の視点から言えるのではないかと私は思います。

最低最悪の「罪惡生死の凡夫」が救われるのであれば、先ほども言いましたように、一切衆生が救われるわけです。それぞれの人生の途上で、下品下生の救済と同じ状況——どこかで自分は悪でしかあり得ない、愚かである、地獄必定ひじょうであるという自覚を起こし、そして専修念仏に帰依して、死ぬまで専修念仏を続けていく。そういうことを、法然上人は想定しているのではないかと思います。

法然上人が、『選択集』の第八章、三心釈で言及した二河白道の比喩を用いて言うならば、人間というものは、衆生というものは、人生のどの時点でもこの二河白道というものを歩

み始めることができる。そして、歩み始めたら最後まで歩んでいく。下品下生で回心するが悪人の場合には、スタート地点とゴール地点が限りなく接近しているということだと思ふのです。専修念仏の信仰者というのは、この二点の間の長短、すぐにスタートして長い道のりを歩んでいく人もいるかもしれないし、下品下生のようにスタート地点とゴール地点がほぼ重なっているような人もいるかもしれないけれども、どこから始めても結局は最後は同じゴールに到達できるということだと思ふのです。さらに、ゴールがあるからこそ、スタートすることも可能なのだと言ひ方を法然上人はしているのではないかと思います。

●その次は救済の根拠として他力があるということです。

他力といひますと、親鸞聖人ということよく言われますけれども、もちろん親鸞聖人の先生である法然上人も、同様に他力ということを非常に強調いたします。

⑥それから、「選択」ということです。

阿弥陀仏の救済の力である本願力は、選択という形で発現します。阿弥陀仏は、その救済力である他力によって浄土を建立して、そして念仏する衆生を全て往生させようという誓願を立てました。ですから、念仏を称えればどんな悪人でも救われるということになるのですが、これは念仏が阿弥陀仏によって選択された行であるからだと言然上人は主張するわけです。仏による選択としては、法然上人は八選択ということを立てますけれども、最も基礎となるのは、阿弥陀仏による本願念仏の選択ということになります。この阿弥陀仏の側の選択に基づいて、衆生の側も三重の選択によって本願念仏を選択していくという構造になっているかと思ひます。

(つづく)

名 和 清 隆

極楽の世界で吹く風

青白く光る銀河の岸に、銀色の空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波をたてているのでした。ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)



微

風

吹

動

ジョバンニは、親友カンパネラとともに、丘の上から列車に乗って銀河へと旅立った。旅の途中で出会う人々と美しく幻想的な銀河の風景。しかし、この列車は親友カンパネラが死者の国へと向かう旅路であった。

まだランドセルを背負っていた頃、近所に住む同級生の友人が死んだ。秋寒の夜に起きた火事によるものであった。近所に集まる消防車のけたたましいサイレンを追いかけるように小走りで向かった先には、見慣れた友人の家があった。圧倒的暴力性に満ちた業火を前にして、私はただただ立ち尽くしながら、中で苦しんでいるであろう友の姿を、自分の頭から必死に追い出そうと努めていた。

その数日後、私の住まいでもある自坊の寺で通夜が行われた。通夜を勤めたのは住職である私の祖父。まだ子どもであった私にとっでは、祖父が勤める通夜という場に、普段学校で会う友だちが夜に自分の住まいでもある寺に来て、これまでしたことのない焼香と一緒にするという行為に、不謹慎ながら心が弾むような心持がして、悲しみに涙を流す友人たちと同じ気持ちになれていない自分が滑稽

であり、また嫌であつたのを覚えてゐる。

星が綺麗に瞬いている夜だつた。通夜が終わつた後も、すぐには帰らず境内に残つてゐた小学生に対して言つた祖父の言葉は、今でも私の心に強く残つてゐる。

「みんな、こつちに集まつて星を眺めよう。〇〇君はね、みんなが見ている星のほうに向かつて行つて、これからは皆のことを空から照らしながら見ていくくれるのだよ。」

私はこの言葉を聞いて、初めて素直に悲しむことが出来た。私を含めて、通夜に参加した子ども達が、死という現実を子どもながらに何となく理解することが出来た瞬間だつた気がする。

今から考えると、浄土宗の僧侶である祖父の言つた言葉は、浄土宗の教えからはやや外れてゐたかもしれない。しかしその場にいる私たち子どもにとっては、圧倒的な説得力を持った言葉であつた。

愛しい人はどこへと向かうのか。往く世界はどのような所なのか。どんな場所に住む人々も、どんな時代に暮らした人々も、切実な問いとして追い求め、それに対し様々な答えが用意されてきた。そして

て亡くなった後に往き暮らす世界の有様は、生きている人々の大きな支えとなり続けてきた。

「銀色の空のすすぎが、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波をたてている」

ジョバンニとカンパネルラが銀河の旅をしながら見た世界、そして、亡くなったカンパネルラが向かった先は、このような優しい光に包まれ、穏やかな風に抱かれる世界であった。

微風吹動

阿弥陀さまのいらっしゃる極楽の世界の風は、どのような風なのだろうか。きつとたおやかに頬を撫でてくれる風に違いない。

法然上人 と 親鸞聖人

【連載二十六】——親鸞聖人の思想成立過程を考える——

林田 康順

(大正大学教授)

法然上人の理解から親鸞聖人の理解への経過

前回、「信心為本の思想」と「信の弥陀廻向論」とを結びつけるため、親鸞聖人は「浄土三部経」の世界観を自ら手放し、自然法爾思想へ向かうことになり、その結果、せっかく法然上人が「生け捕り」して下さった法身を「取り逃がし」、法然上人が確立された相対的三元論の世界観を絶対的一元論の世界観に回帰してしまった、と指摘しました。もちろん、その直接的背景が、親鸞聖人ご自身の宗教体験に求められることは言うまでもありません。しかし、あえて今回は、法然上人と異なる理解に至った親鸞聖人の思想成立過程について順を追って推測してみたいと思います。

①『観無量寿経』第九真身観文「光明徧照十方世界念仏衆生攝取不捨（報身）」

↓専修念仏批判・念仏相続輕視

法然上人は、『観無量寿経』第九真身観文に説かれる阿弥陀仏、あるいは、同経に広く開示される有相の弥陀三尊のお姿や極楽浄土の莊嚴を報身・報土として受けとめられます。そして、その報身の阿弥陀仏が「光明徧照十方世界念仏衆生攝取不捨」、つまり、阿弥陀仏の相好から放たれる光明があらゆる世界を照らし出し、お念仏を称える人々を救い摂って極楽浄土にお迎え下さると説示されます。

しかし、親鸞聖人へと連なる方々は、次のような理解に移行していくことになるのでしょうか。すなわち「そもそも、あの法然上人がわずか一遍のお念仏で往生が叶うとおっしゃっているのだから、自力でお念仏を相続しているあなた達は阿弥陀仏の本願のお力を疑って、形だけ立派に振る舞っている（疑心の善人）に他ならない」と批判するのです。これが「専修念仏批判・念仏相続輕視」という形となつて表面化します。

②専修念仏批判・念仏相続輕視→一念往生説→念仏行の主体批判

そうした「専修念仏批判・念仏相続輕視」の結果、「ただ一遍のお念仏で往生が叶う以上、念仏相続という振る舞いは阿弥陀仏の本願を疑っている」という「一念往生説」へと至ります。ところが、さらにそうした理解に対し、「そもそも私達のような凡夫が阿弥陀仏の本願に誓われた一遍のお念仏を称えることができるだろうか、いやではしない」という

疑念が起こり、これが「念仏行の主体批判」として浮かび上がってきます。

③ 念仏行の主体批判↓信心為本説・信心往生説↓信心具足の主体批判

そうした「念仏行の主体批判」の結果、「そもそも私達のような凡夫には行を修めることなどできはしない。だからこそ阿弥陀仏は私達が修めるべき行のすべてを成し遂げていただいたのだ（大行）。私達は、そうした阿弥陀仏のすべての営為を信じるだけで救いが確定するのだ」という「信心為本説・信心往生説」に傾斜していくこととなります。すると、さらにそうした理解に対し、「そもそも私達のような凡夫が阿弥陀仏の望まれる信心を具えることができるだろうか、いやできはしない」という疑念が起こり、これが「信心具足の主体批判」として噴き出します。

④ 信心具足の主体批判↓信の弥陀廻向論↓信心の具足者・不具足者への疑問

次に「信心具足の主体批判」の結果、「そもそも私達のような凡夫は阿弥陀仏の負託に応えられる信心を発することなどできはしない。だからこそ阿弥陀仏は、私達が具えるべき信心のすべてを私達に回向されているのだ（大信）」という「信の弥陀廻向論」へと転換していきます。

そして、ここからが前回の内容と密接に関係することとなります。すなわち「そもそも阿弥陀仏が私達に信心を回向して下さっているにもかかわらず、どうして正しい信心を具

足している〈他力の悪人〉と具足していない〈疑心の善人〉がいるのだろうか、阿弥陀仏の慈悲の働きが絶対であるならば、そうした現状は不可解ではないか」という、「信心の具足者・不具足者への疑問」となって沸き起こってくるのです。凄まじい弾圧を見聞した親鸞聖人にとって、どうして誤った信心を抱いている「疑心の善人」には累が及ばず、正しい信心を得ている「他力の悪人」だけが、苛酷な弾圧を背負わなければならないのか、さらに、そもそも阿弥陀仏は、弾圧を加えた者達も含め、なぜすべての人々に正しい信心を回向されなかったのだろうか、という苦悩となって眼前に立ち上がったことでしょう。

⑤ 信心の具足者・不具足者への疑問

↓ 報身・報土説（相対的三元論）への疑問（指方立相・有相莊嚴の輕視）

↓ 法身・法土説（絶対的一元論）への転向

↓ 絶対的な「働きそのもの」としての阿弥陀仏觀の確立Ⅱ自然法爾思想の成立

そうした親鸞聖人による「信心の具足者・不具足者への疑問」は、「浄土三部經」が開示する阿弥陀仏と極樂浄土への疑念、つまり、「報身・報土説（相対的三元論）への疑問」へと展開していったと考えられます。そして親鸞聖人は、有相の報身仏では限界があると結論づけられたのでしょうか。これが「指方立相・有相莊嚴の輕視」です。

ここで誤解を恐れずに言えば、次のような原則を理解しておく必要があります。すなわち、法然上人が提唱された、現世をどこまでも穢土と捉える相対的三元論の世界觀によれば、現世でもたらされる利益はどこまでも不完全なものに留まり、だからこそ阿弥陀仏の

働きが完全に及ぶ西方極楽浄土への往生を目指すのです。もし、阿弥陀仏の救済の働きが現世において完全にもたらされるとするならば、現世を厭う必要など毛頭ありませんし、それを理論的に徹底してしまえば、娑婆即浄土の絶対的一元論の世界観に逆戻りしてしまう結果を招きかねないのです。（その詳細は、拙稿「法然上人における祈りについて―特に現世利益をめぐって―」（『日本仏教学会年報』七〇、平成一七年）をご覧ください。）

一方、親鸞聖人は、そうした衆生救済に限界を認める阿弥陀仏ではなく、常に完全な救済の働きを続けておられる阿弥陀仏へとその信を傾けていきます。これが「法身・法土説（絶対的一元論）への転向」であり、「絶対的な（働きそのもの）としての阿弥陀仏観の確立」となります。親鸞聖人が「弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり」（真宗聖典六二二）と表現されるように、この世をこの世たらしめている働きそのものこそ阿弥陀仏に他ならず、その働きに浴し続けている私達はすでに救われている存在であると理解され、それは「自然法爾思想の成立」に他ならないのです。つまり親鸞聖人は、正しい信心を具足している「他力の悪人」と具足していない「疑心の善人」が混在しているという理解ではなく、すべての衆生に正しい信心は回向されており、阿弥陀仏による救済はすでに実現されているという視点に立たれたのです。

⑥ 自然法爾思想の成立

↓ 気づき（聞法）の重要性と報恩感謝の念仏の成立

↓ 現生正定聚・便同弥陀の提唱

↓ 「光明徧照十方世界一切衆生攝取不捨？」（『観無量寿経』軽視）

そんな「自然法爾思想の成立」が果たされると、次に阿弥陀仏から回向されている他力の信心に気づくか気づかないかが問われるようになります。そのため真宗では「気づき（聞法）の重要性」を訴え、すでに救済が実現されているという事実に基づいたならば、「助けたまえ」という救済を願うお念仏ではなく、「お救い下さりありがとうございます」という「報恩感謝の念仏の成立」になると主張します。

こうしたいくつかの段階を経た結果、親鸞聖人は「現生正定聚」（『教行信証』真宗聖典一八七）や「便同弥勒」（『教行信証』真宗聖典二六四）といった用語を用いられるようになります。すなわち、梯実圓氏が「今私が『私』と言っているような私が、私でなくなつた時、実は天地が一枚に解け合い、そして万物が光輝しているような、そんな領域が開けてくる。そんな領域が浄土の世界じゃないのか」と述べられたように、気づき（聞法）を通じて、阿弥陀仏の救済の働きが及び続けている眼前の世界をそのまま浄土として受けとめられてくるのであり、私達はこの世界にいながら、再び迷いの境地に戻ることはない「現生正定聚」の境地となり、一生補処の弥勒菩薩と等しい「便同弥勒」の境地になると主張されるのです。

そして、こうした理解を徹底すれば、冒頭に掲げた『観無量寿経』に説かれる「光明徧照十方世界念仏衆生攝取不捨」という一節が不都合に映ります。そもそも、他ならぬ報身の阿弥陀仏であれば、衆生に対して「念仏」を修めることを浄土往生の条件として課された理解でき、事実、法然上人はその通りに経文を解釈されます。一方、親鸞聖人による阿弥陀仏理解に基づくならば、衆生の側に一切の条件を課さない「一切衆生攝取不捨」と

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180245231

読み替える必要が生じます。しかし、经文そのものである以上、訓点の改変だけではないか
んともし難いのが現実です。そうしたことも要因の一つになって親鸞聖人は、三願転入に
代表される『観無量寿経』や『阿弥陀経』所説の有相の仏・仏土を方便化真・方便化真土
に分類づける主張を確立し、『観無量寿経』輕視」の姿勢へと進んでいったのでしょうか。
以上のような一連の流れが、親鸞聖人の思想成立の過程と推測されます。こうした流れ
を理解しておけば、法然上人と親鸞聖人、浄土宗と真宗の教義の峻別に大きく役立つこと
でしょう。

(続く)

さっちゃんね

165

かい日

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画『コンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

編集後記

念仏の声高らかに月を指す

備潤

今年もまた大事な人、まだまだ生きていなくてはならない人が、お浄土に逝ってしまいました。お一人は本号でも特集した真野龍海先生であり、もうお一人は私と同期の茂田真澄師です。

真野先生は九七歳という大往生ではありますが、現在の状況の中ではまだ元気でいて戴きたかった。大変な学者でありながら、多趣味な文化人であり、コーヒーがお好きで編集会議には全員の分をご持参になり、そしてとにかくユニークな先生でした。法華経を論じたり、コーラスで賛美歌をお歌いになったりされた。

「アベマリア」の音楽と同衆の念仏の声で出棺された台々は、浄土宗始まって以来でしょう。その法名の道号には「説教」と入っているように、フランスが好きな先生でした。

茂田師はアーユス仏教国際協力ネットワークの理事長を設立の平成五年から努め、また寺の移転からの拡張計画を推し進め、そして何よりも「忘己利他」人々に寄り添うことを一番に考え、二十四時間電話を受け、行政書士や弁護士、医者など知人のネットワークをつくって、実践してきた人でした。死んではいけないと誰もが思える人でした。彼の道号は「街灯」です。暗いところを無くし、どんな

ところにも光を当てたいという彼の思いが入っています。彼は照れ屋で、褒められることを極度に嫌い、我々の前ではいつもおどけていました。「還来穢国度人天」を。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十五巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 令和元年十月二十日
発行 令和元年十一月一日

発行人 佐藤良純
編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷
〒一〇五・〇〇一一

東京港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人讃仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七
FAX 〇三(三)五七八七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博博(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康貴(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松清泰彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



上と右下（ほぼ原寸）が私の手元にあるお守り。左はネットのオークションに出品されていた写真。こうして並べてみると、私のものはかなり磨滅が進行しているが、違いがよくわかる。確かに手彫りなのだろう。天地 25mm、左右 20mm、厚み 2mm、重量 8g

この天使を描いたお守りが、いつごろから私の手元にあるのかわからない。こういったものを買うような少女趣味は持ち合わせていないから、誰かからいただいたものか。そのあたりの事情は記憶からすつぽり抜け落ちている。ここ四、五年仕事机の横にずっと置かれたまま。もっと前からあったのかもしれない。とさどき手にとって眺めたりしていた。

すこし気になって、ネットで「天使のお守り」を検索してみた。驚いたことに同じものがオークションに出品されていた（現在はオークションは終了）。商品説明のサイズも重量も同じである。商品名は「手彫り大天使ミカエル御守り」とある。比べてみると微妙な違いがある。私の手元のお守りは、磨滅がすすんでいけるせいで羽や衣の襷が消えてはいるが、違いはよくわかる。商品名にある通り、手彫りなのだろう。

材質はなんなのか。商品説明には書かれていない。銀のはずはないだろうから、こういった工芸品やメダルによく使われる合金の一種だろう。スズを主成分とするピューターという合金がある。これは低融点合金なので加工もしやすいらしい。スズのほかにアンチモンや、鉛、銅なども含むことがある。手彫りであるから、溶かした金属を型に流し込んで固めるわけではないのだろう。

オークションの書き込みに、出品者へ次のような質問があった。

「この天使が大天使ミカエルである証は、どこにありますか」

答えは「おおそ天使信仰における対象はミカエルです。大きな翼を広げて抽象的ながら慈愛に満ちた姿勢を示すのはミカエルの特徴です」というものである。ちよつと怪しい世界に入っていくさうである。

天使信仰（キリストの教えとはまったく別の）を中心とする、スピリチュアル系の団体に関係した女性が身近にいたが、これはもうどうしようもない。当人がどのような信仰を持とうがそれは自由であるから、あれこれ批判めいたことは一切口にできなかったが、彼女にとって世界は天使を中心に回っていた。それで幸せになれるのなら結構なことである。

さて私の天使のお守りだが、見ての通りすつかり磨滅している。きつとたくさんの人の手を経てきたのだろう。イヤリングやペンダントにするわけではなく、ポケットや財布にそつと忍ばせておくお守りである。

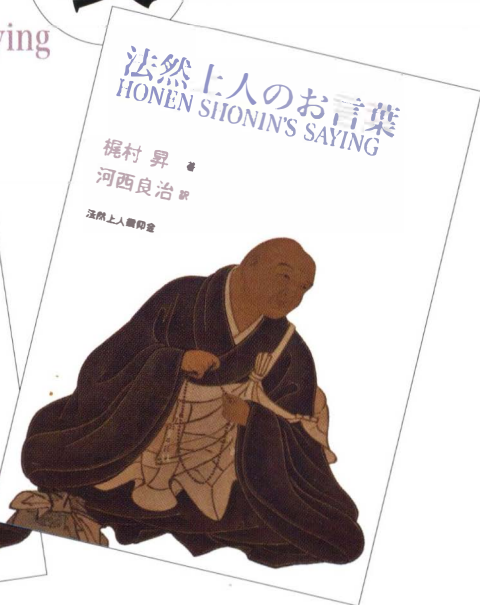
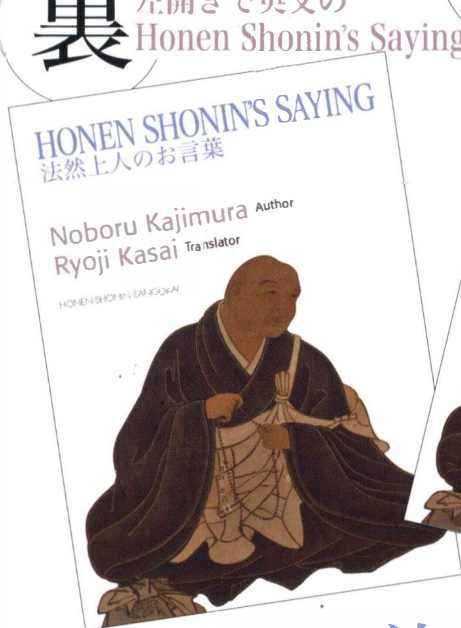
月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表

右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 **FAX : 03-3578-7036**

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。